

第3章 日本の里地里山と SATOYAMA

○伝わりにくい里山概念

- ・「里山」という言葉の定義 … 里山の意味を正確にとらえることは、難しい。
1960年代になって、森林生態学者の四手井綱英（しでいつなひで）が提唱した概念。
「農用林」… 落ち葉や下草を集めて堆肥にするなど、農業のために用いる森林。
しかし、専門的すぎるので、「里山」を農用林の代わりに用いる。
↓
つまり、里山のもとの意味は、「人間によって活用された森林」のこと。
- ・「薪炭林」… 薪や炭をとるための樹木を育てる。
- ・「二次林」… 農家によって利用され、人の手が入った森林。《国東半島のクヌギ林》
- ・「採草地」… 農家の屋根を葺くための藁草などを育てる原っぱ。昔は「萱場」《静岡の茶草場》
- ・狭義の里山 … 「二次林」や「二次草地」を表す。
- ・広義の里山 … 狭義の里山に田んぼやため池なども加えた、伝統的な農村の景観全体を含める。

○里地里山、奥山、そして里海

「里山の学術的な再定義」

- ・「里地」⇒ 里山が表す範囲は、農用林・薪炭林・採草地などとして維持されてきた二次林や二次草地に限定し、それ以外の田畑やため池など、農業活動そのものによって生み出された景観などを含む、多様なモザイク状の土地利用。
- ・「里地里山」⇒ 農村景観全体

里山と里地里山の関係 (p.168)

里山—二次林（農用林、薪炭林）、二次草地（採草地、萱場）

里地里山—里山のほかに、農耕地（畑、水田）、ため池、水路、農村集落など

- ・「奥山」… 人里離れた自然林や広大な人工林に覆われた山（人々の暮らしとの距離が、里地里山とは異なる。）
- ・「鎮守の森」… 人の手がほとんど入らずに保護されおり、神が下りる場所 = 「奥山のサテライト」
韓国 … 宗教的な森である「マウルスツプ」も、「マウル」（日本の「里地里山」にあたる）の構成要素

◎日本の鎮守の森を、韓国のように里地里山の要素に含めるべきかどうかは、今後の議論にゆだねる。

- ・「里海」⇒ 人手が加わることによって生産性と生物多様性が高くなった海」《能登の里山里海》
九州大学の柳哲雄さんが『里海論』という著書の中で提唱。

◎里地里山と里海の共通点は、それを維持するためには、むしろ人の手を加え続けた方が良い。

*手を加えすぎてもダメ…自然と人為のバランスが必要 ⇒ 【人間も自然の一部である】

環境省の自然環境基礎調査 「重要里地里山選定等委託業務報告書」 2008 (p.171)

里地里山的環境—①農地、②二次林、③二次草原の合計面積が50%以上を占め、3つのうち、2つ以上を有する地域。
・日本の国土全体の39.4%が、**里地里山**になり、その約3割が都市圏に分布。

◎各地域の里地里山について考えていくには、まず現地での生活を自分の目で確かめて、よく知る。

○森林に「人の手が入る」ということ

- ・手つかずの自然に注意をはらっているうちに、どこにでもある里地里山は、保護運動の対象外
1960年代には、都市近郊の里地里山が、造成によって住宅地となり、都市から離れた場所ではゴルフ場やスキー場などのレジャー施設になる。
- ・こうした場所が開発の対象になったのは、経済的な意義をなくしてしまったから。
- ・里山で生息している生きものには、人の手が入らなくなると消えてしまうものも多い = (カタクリ)

※「里山で草をとり、木を伐るのは、自然破壊」 = (ニュータウンに移り住んだ人々)

- ・日本にある自然の生命線は、自然と人間との関係論におきかえることができる (p.185)
= (自然を守ることは、森林を守ることであり、里山を守ること)
- ・両者のバランスが保たれていたのは、明治の終わりごろから、戦後になって燃料革命が始まるまで。
- ・私たちがめざすのは、この半世紀にあった環境。自然と人為のバランスを保ちつづけることが、「持続可能」(サステナブル)な環境を有すること。【SD】

◎平地に造られた里山である「三富新田」を維持する課題。

○入会地としての里山

- ・「入会地」… 地域農家の共有地 = 一般的な里山
- ・「コモンズ」… 公有地 (パブリック) と私有地 (プライベート) の中間形態
- ・「ニューコモンズ」(新たなキーワード) … 地域社会に閉じられたコモンズではなく、もっと開かれた里山里山管理の「水平的な関係」(p.194)

◎「ニューコモンズ構想」⇒ 優秀なオルガナイザーが出てくれば、かつて地理的な関係によって必然的に形成されていたコモンズが、今度は、強い意志をもって社会的な関係を認め合うコモンズにおきかえられる。

○特別な生産物が、特別だと思われていない

- ・今の日本人が健康的なまま長生きする社会をめざすとなると、食生活が大きな部分を占める。《阿蘇のあか牛》
- ・自分の体の一部になる食べものに無頓着という点が、一番の問題点【食育との関連性】
- ・地産地消の表示では、九州産というよりは大分産、大分産というよりも、G I A H Sに認定された国東半島のA地域産というように、狭ければ狭いほど、生産物に対する信頼度は増す。
- ・地元の里地里山で生産された農作物を、地元の販売ルートに乗せる時、「道の駅」が重要。
- ・ITは消費者に近い所でしか整備されていない ⇒ 生産者サイドのIT化 = 「上流側のIT化」が必要。

◎里地里山を管理する組織でIT化を行うことが自然 = 「地域管理公社」設立を主張。【ニューコモンズ】

○日本発のSATOYAMAイニシアティブ

- ・里山は、世界各地で、ローマ字表記のSATOYAMAとして認知が進んでいる。
- ・日本の里地里山のように、地域の人たちが自発的に産品をつぎつぎと開発し、結果として多品目を生産するという方法は、特筆すべきシステム。【プランテーションのモノカルチャー】

「21世紀環境立国戦略」第一次安倍内閣（閣議決定）2007年6月（p.207）

- ①二酸化炭素を大幅削減する「低炭素社会」
- ②自然資源を循環利用する「循環型社会」
- ③生物多様性と生態系を保全する「自然共生社会」

3つの目指すべき社会モデルをかかげ、これらの統合を通じて「持続可能な社会」を実現する。

- ・環境省がSATOYAMAイニシアティブを提案、21世紀環境立国戦略に含まれた。
- ・COP10(2010)では、日本発の自然共生社会というアイデアが世界レベルで認識され、「SATOYAMA」発信の土台ができる。
- ・里山と里地の具体的は標記については、狭い意味で用いられる里山をSatoyamaとし、広い意味の里山（里地里山）をSatoyama Landscapeとし、使い分けることにした。

◎上から目線のSATOYAMAイニシアティブ ⇒ 多様性の尊重へ

OGIAHSとSATOYAMA

- ・SATOYAMAイニシアティブの調査対象地と、OGIAHSサイトは、大きく重なる。

しかし・・・FAOはSATOYAMAイニシアティブの国際会議を受け入れず・・・

- ・OGIAHS=FAOと農林水産省 ⇔ SATOYAMAイニシアティブ=生物多様性条約事務局と環境省
＜（より広い領域）

◎OGIAHSもSATOYAMAイニシアティブも、ともに未来志向で同じ目標に進んでいる。【SD】

◎日本の農業が、世界の農業の進むべき方向性のカギを握っている。【農業の持続可能性】

日本は、欧米の工業先進国が主導してきた農業と開発途上国で守られてきた農業がともにある希少な場所。